The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古今集両度聞書を中心としての解釈論
Author(s)	今井, 優
Citation	語文. 1955, 15, p. 33-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68482
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古今集両度聞書を中心としての解釈論

今井　優

一

言語作品の解釈は実にむずかしい。殊に和歌という微妙な表現形態をとるとき、その解釈・批評は複雑多岐を極める。その変遷の歴史をたどりながら、同時に「解釈をする」という人間の精神的行為とはどういうものであるかを反省してみたい。文献の本文批判なぞの基礎作業と併行して文献学に於ては、その文献内容の了解が必要であろう。了解のためには解釈をしなければならない。解釈するとはどういう精神行為であるかについて反省なく解釈することは機械の性能をしらずに機械を操作するようなものであろう。

だからといつても、解釈への反省は瞑想して思弁的に到達せられるものでなく、解釈の経験を践んでゆきながら、その間に経験が意識に上せられて整理されるのであろう。したがつて先ず第一の着手として古今集の研究史を中心にしてまとめてみたいのであるが、更にこゝでは小さく限定して古今和歌集両度聞書を対象とする。その他の資料も引用するがそれらは所詮両度聞書の性質を一層判明させるためだが、同時にこの研究史の性質を自身で予測してみたくもあつたので、資料が多岐にわたらぬ限り、研究史の構想めいたことにも興味をもつて筆を動かせた。

二

宿近く梅の花植ゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれける

右の歌に対して聞書は次の註をつける。

恋の歌にはあらず、たゞ梅を愛する心也、袖のにほひにまがひてそれかと思へばなり

先ず「恋の歌にあらず、たゞ梅を愛する心也」と記したこの註釈の意図は、この歌は究極に於て梅を愛するということを表現しようとしているのだ。人を恋しく思うということを表現しようとしているのではない、と説明するためにあるのだと考えられる。次にこの説明と並列させて「袖のにほひにまがひてそれかと思へばなり」と説明しているのは、梅の香を袖の香とあやまつというこの歌一首全体の趣向の中心点を要約したものと考えられる。

さてこれだけのことを反省しておいて、この歌の解釈の過程を順序だててみよう。先ず第一にこの歌一首全体を通読するであろう。その次には、この歌の趣向の中心となつているものは、梅の香が人の袖の香にあやまたれるということであると、我々は読みとる。更

に一歩奥深く入つて、その趣向を促す動機というものは、梅を愛するという単純な境地にねざしていると読みとらねばならぬのである。もしこれが解釈の過程であるとすれば、制作過程はこの解釈の過程を逆進させればよいのであつて、結局次の様に図式化してみたらどうだろうか。

→ 心 (1恋の歌にあらず、たゞ梅を愛する心なり
← (2袖のにほひにまがひてそれかと思へばなり
→ 詞 宿近く梅の花植ゑじあちきなく待つ人の香にあやまたれける

心→詞は制作の過程であり、それに逆進する矢印は解釈の過程である。このように考えるなら、両度聞書の解釈作業というのは歌を制作する際の心的経過を、解釈者が解釈の際に投影させているといつていゝだろう。

当時の歌学書によつて、歌の制作の過程を要約すれば、題→心→詞という順序だろう。即ち与えられた題がある。その題をよく〳〵心得てそこより心をめぐらせ、その心を表現するにふさわしいなるべく既成の詞を使つて一首の歌に仕上げるということであろう。この題より詞に至る中間領域の心は題より出発して恋貌流動しながら詞に到達するのだが、その変貌流動の相をさし当つて二大別しているのが両度聞書である。一つは究極の心と、もう一つはその心によつて促される趣向というべき心である。これは両度聞書から抽き出される考えであるが、更に「三儀十一ケ伝」(大阪府立図書館蔵)という書によつて傍証しうるのではないかと思う。(この書三巻の内第一巻奥書には、右之一巻者詠歌大本三儀之大事口訣密伝之聞書也大蔵卿二位法印玄旨逍遊軒明心居士的々相承之趣而読方極秘一貫伝心之正理也雖然年来此道感厚心篤実以今書伝之令附与訖広沢隠士長孝判)三儀とは体・詞・心の三をいうのであるが、その心を説明して

此心に情の字籠れり情の字は意・識に当るなりされば心・意・識をつかねて歌を詠ずる心とはいふ也　歌はもと心よりきざしたちて意にうつる時柳はみどり花は紅と知る也識にうつる時柳はたをやめの髪とも見花は雲かといひ月は雪紅葉は錦などいへるごとく深く情を入て歌と云物には成也

と述べているが、こゝに述べられる心と情(情を意と識とに更に細分している)の二段階内至三段階の区分を見るべきである。更にこの書はいう。

二条家の正流古今集より建立也　されば古今の序にやまと歌は人の心を種としてと書けるが和歌の根元也　心は色もなく臭もなく潔白清浄なれども心の一法きざして意識にうつる時別識見識して見るもの聞くものにつけて云出さる也

右の如く読んでくる時、これらの考えは古今集序の「さゞれ石に喩へ筑波山にかけて君をねがひ、中略また春の朝に花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き下略」という一節を注目させるであろう。又、同じく序に見える賦比興という六義は、たとへ詩学の直訳であるとしてもこれを説明するもので、見るものきくものを素材として趣向を立てるという考えに支えられて輸入されたものであろう。要するに古今集は趣向が過剰という程に意識せられているということである。と同時に一方、その構想の背後には素朴な情感の息吹いていることに注目しなければならないのである。趣向を無視することは出来ないが、それに終始してしまつてはならぬのであ

る。もう一例を挙げよう。

→ 心 ←
1 恋にはあらず人の心のうつろひやすき事をいへり
2 身悲しみて其のあたりに花の木も今はほりうへじと こと
ぐさにいへるなり

詞 花の木も今はほりうゑじ春立てばうつろふ色に 人ならひけり

この場合も、構想の中心点（心$_1$）と更にその奥に動く、素朴な詠嘆（心$_2$）とを指摘していると考えられる。したがつて

君こふる涙しなくば唐衣胸のあたりは色もえなまし

涙の水のおほき心なり

右の様な聞書の注釈も、先の方法に従つて

→ 心 ←
1 涙の水のおほき心なり
2 註 欠

詞 君こふる涙しなくば唐衣胸のあたりは色もえなまし

この様に整理し理解することが出来る。この心$_2$の注欠の部分を私自身が補うと

→ 心 ←
1 涙の水のおほき心なり
2 恋の涙で胸の焦れを消す

詞 君こふる涙しなくば……

右が心$_2$が欠けている場合であるとすれば、

春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつうふと見む

よきては除きて也心つから散るものと思はむ風に恨みもあらじといふ也

右の註は心$_1$が欠けているといつていい。

→ 心 ←
1 註 欠
2 心づから散るものと思はむ風に恨みもあらじと いふ也

詞 春風は花のあたりをよきてふけ……

やはり右の様に整序し得ると思うが、心$_1$を強いて補えば「花の散るのを惜しむ心」と注すればよいであろうか。

蟬のはの夜の衣はうすけれどうつり香濃くも匂ひぬるかな

うすき縁をいはんとて蟬のはの夜の衣と云也　主の心のなつかしくうるはしきさまはかゝる折にもにず侍る事をいはんとてうつりかこくもとよめる也

右の様な場合では、一首全体の詞↑心方式は記述せられていないが、これは左の様に整理出来よう。

→ 心 ←
うすき縁をいはんとて
主のなつかしくうるはしきさまはかゝる折にもにず侍る事をいはんとてうつりかこくもとよめる也

詞 蟬のはの夜の衣と云也

即ち、部分的に歌の各句の詞のよつて出てくるゆえんの心を説いているのである。

袖ひぢて結びし水の氷れるを春立つけふの風やとくらむ

此歌よく時の巻頭にはあたる也　実に朔日の心有也　心は夏のほどたづさはりつる水の、氷ゐるさまも無興たることにて侍りつるを春来りて東風吹とくさまなどいへり心もめづらかなる心なり又袖ひぢてとは大かたひたす也　但むつまじく也　四季をよめるなどいふ事は不ノ用　只光陰のうつる由也　むつまじき人のおもはずへだたりぬるもむつまじくなる世のことはりをそへたり

右は例によつて次の様に整序出来る。

題　此歌よく時の巻頭にあたる也

心　1実に朔日の心あるなり（詞書には、春立ちける日よめる）
　　2夏の程たづさはりつる水の　中略　只光陰のうつるよしなり

詞　袖ひちて結びし水の……

註　四季をよめるなどいふ事は不ノ用とは古今延五記に袖ひぢてとは夏の心結びしに秋をおもへり氷れるは即冬也　春立けふと読て一首の中に四季をつかさどる也

若し右の様だとすれば、傍線の引いておいた「むつまじき人のおもはずへだたりぬるもむつまじくなる世のことはりをそへたり」という考えはどういう解釈技術から由来するものであろうか。これを説明する先に「心」というものの性質をもう一度振りかへってみよう。和歌口伝（日本歌学大系第四巻）に

うしといひてむかしはなにを歎きけむしづみはててもあられける身を

まちし夜のふけしをなにに歎きけん思ひたえてもあられける身を

右の二首を載せて《同心歟》といっている。右の二首が同心であるのは共に、以前は失意を歎いたが失意も又耐えられるものであるという発想形式に於て同じなのであって、内容からいえば、前者は恐らく官位についてであろうし、後者は恋であるから、内容に於ては相異するものである。しかしこれを同心というのである。これで心の一特性が窺われる。

はじめもはてもしらぬ世の中
和田の原よせてはかへるおきつ浪

右の連歌の前句に後句がつくのは、共に「心」が悠久の存在を指摘しているからである。この付合を説明して「前句の姿詞をからで、たゞ心にて付たるなり」（ささめこと）と解説している。

故里も残らず消ゆる雪を見て　　宗長
世にこそ道はあらまほしけれ　　宗祇（湯山三吟）

右の様に春の句に突如として雑の句が付く心法に注意すべきである。句の内容（この句が提示する客体界の構成・秩序）からいえば、この二句は全く異るであろうが、前句を解釈する主体者が一陽来復を心とする時、その心を以って後句も存在し接続するのである。心とは客観的に提示せられた内容ではなく、その内容を提示するに至るまでの制作者の心の制作機能をいうのである。前句を読むことによってその句の制作者の主体的機能的「心」を発見し、その心によって再び後句を制作するのである。前句を読むことは後句を詠むことになるのである。その際その心によって結果し出来上った句の意味内容が前句後句に於て飛躍していることはいうまでもない。さて

袖ひぢて結びし水の氷れるを春立つけふの風やとくらむ
むつまじき人のおもはずへだたりぬるもむつまじくなる世のことはりをそへたり

右の二つを並べるなら、前者より後者への移行は、「時の推移」という制作者の心が、前者の歌を生み出したとすれば、同じくその心の機能が後者の「むつまじき人のおもはず……」という批評を生み出しているのである。　この二者は内容からいえば全然相異するが、この歌に、制作過程の機能的「心」を投影すれば、前者より後者の註が出てくる必然性が難なく受けとれるのである。主体的機能的「心」を切り離し、客観的文献資料の指摘による以外には恣意的な注をつけない客観的解釈方法や、或いは詞の表を精細に観察する

語学的方法とは異り、解釈者自身の主体的「心」が注釈作業の絶対的拠りどころとなつているのである。これは先に両度聞書の解釈方法は制作過程を投影したものであると述べたことと符合するであろう。先の三儀十一ヶ伝という書には心を説明して「心は本来本有不動の心王也釈名曰心は纖也所レ識纖微無レ不レ貫ぜ臨済曰心法無レ形通ニ貫十方ニ」という。心に起る意識の現象が客観的事実乃至は詞の表面の有する内容を支配するのである。客観的資料と主体的「心」なき詞の表面との制約の枠内で解釈を進める立場からすれば、先の様な註釈は突飛なもののように考えられるが、解釈者自身の意識に現象する心的事実を絶対的根拠とする時、さほど無理なく読み受け入れられるのではなかろうか。歌を読むということは、やがて己れの心を読むことであり、更に歌をよむ（詠む）ことなのである。心→詞が詠むということであり、心←詞という逆過程が読むということになる。心⇄詞という心と詞との関係運動が「よむ」という精神行為であつて、詠と読には共通性があるのではなかろうか。和歌の歴史、歌学の歴史をふりかへつてみても、歌人達は、他人の歌の詞をその歌の心とは異る自身の歌の心で切り取つて自己の歌の心の表現に用いるという本歌取をしてきたが、これなぞは、詠読一体のもつともよい例となろう。

述べることがひどく先走りしたようだがさて両度聞書ではこの種の主体的「心」を投影した解釈が強く、時にはそれが方法論的に固定化してしまつている。即ち、誹諧歌の解釈に於ては「此の誹諧の事他流之義は物をいかにもよくいふ人あらぬ事をいふが、しかもよくいひなせる由とぞ当流に不レ用レ之当流の心は非レ道教レ道ニ非ニ正道ニ進ニ正道ニと云是かなへり」といつている。誹諧歌とは裏に教訓徳道を説くものであるというのである。

註　両度聞書のこの誹諧歌に対する観方と次の俊頼髄脳の誹諧歌観とを比べるとその間のいきさつがはつきりする。

誹諧歌といへるものありこれよくしれるものなし　古今についてたづぬればざれごと歌といふなりよく物いふ人のざれたはぶるるが如し

実例を挙げるなら梅の花見にこそ来つれ　の歌では此歌の心は鶯の人に恐れてとびなきするが人来人来といふやうなれば我は花こそ見にこしか鶯にはさはらぬものをいかで人くるぞとはいふと云心也（心$_2$）

鶯の我に心ををくよし也（心$_1$）

花見にくる人は我ためにはあしからぬ人ぞとしらぬは鶯のをろかなる也　又鶯の花に心をやりて木伝ひなどするをこなたもおもひやらぬ心にや（読者の感想）

下心我思ふ事をば人にいはでしかも人を恨み人を恐れ又人をいとひなどするは皆此うぐひすの心なり　たゞひとつにおもふ事あらんをばよろしきさまにいひはてて是心をうけんにこそ匿レ怨而友とするを是人といふをきらふ心也

右の様に下心を誹諧歌の総てにわたつて附している。このようにまで主体的「心」を徹底せしめ、方法論的に固定せしめれば、無理が生じてくるといわねばならない。しかし発生的に考えれば、極く自然な発生なのである。次に主体的「心」の立場から古今集遠鏡を批判してみよう。批判することは、遠鏡の価値を認めることであると同時に、その限界を考え、又、両度聞書の本質を一層判明させるためである。

三

宣長の遠鏡は、詞玉緒の系列に属する語学書であるといつていいものだろうが、又古今集の注釈書ともいえよう。遠鏡に対する注釈技術上の不満は、両度聞書の立場からも生ずるが、同じような立場からの不満は、既に遠鏡補正によつてところどころ指摘されている。例えば、巻頭の袖ひぢて結びし水のという歌では、

釈のことばげに近くうつされたるものから、もとより初学の心あさからん者にものされたらめば猶ときたらぬ心地にこそ、袖ヲヌラシテスクウタ水とばかりにては初学の心に、昔人のいかなることの習にかゝるわざはなせしなどと思ひて作者の心汲みとり難てなるもあるべしこの歌夏すぎ秋去りたるものいつしか冬さへすぎて春立来りひととせのとく過ぎし思ひを細かに知らしむべきには去年ノ六七月ノ頃ニハ涼ミナガラノ手ナグサミニ袖ヲモヌラシテスクヒナンドセシ水ノ冬ニ成リテハ氷ツテアルノヲ最早春ノ来タ今日ノ風ガ吹キテ解カスデアラウカサテモ〳〵年ノ過ギ来ルノハ造作モナイモノヂヤマア

註　遠鏡では、袖ヲヌラシテスクウタ水ノ、水ツテアルノヲ春ノ来タ今日ノ風ガ吹キテトカスデアラウカ

さて、詞の跡を追つて一首の歌の論理的構成を把握し、それを口語訳することは、歌の解釈の必ず前提となるべきものであり、それを精細に遂げたことは宣長の功績であるが、それだけの第一段階に終始することは歌の完全な解釈にならない。この歌の表現するところの奥の心には、一年の早く過ぎた思ひがある、それを述べねばならぬ、と補正はいうのである。この歌についての両度聞書の註とその註の図式とは少し前に記しておいたが、それと比較してみると、「心[2]」「夏の程たづさはりつる水の　中略　只光陰のうつるよしなり」が遠鏡補正の指適しているものに当ることがわかるだろう。補正は右に記した如くこの歌夏すぎ秋去りたるもいつしか冬さへすぎて春立来りひととせのとく過ぎし思ひを細かに知らしむべきには」といつている。

主体的「心」を詞表より読みとるということは、いいかえれば、その歌一首の趣向の中心点内至はその歌一首の眼目を指適することなのだから、その中心点内至は眼目から見れば、歌の各句には比重の相違が生れる筈である。ところが遠鏡のように詞の表面を追つて口語訳してゆけば、各句の比重は指適することは出来ないであろう。物語の文章とか客体界の内容と一対一に対応する写実的な文章に於ては、主体的「心」とは一応切離されて、文章それ自身が独立した客体的な世界を構成している。主体的「心」の参画はなくして、それ自身で完結した世界を持つているのであるが、歌に於ては、主体的「心」が詞表の背後に動くことによつて始めて一つの世界が完結するのである。例えば、両度聞書では、

大空を照り行く月し清ければ雲隠せども光消なくに

心　詞書にあらはなり

右のような註をつけているが、詞書とは古今集本文によれば「田村のみかどの御時に斎院に待りける明子のみこを母あやまちありといひて斎院を易へられむとしけるをその事やみにければよめる」というものである。即ちこれが主体的「心」であるといえる。さてこれを「空ヲ照ツテイク月ガ清イニヨツテナンボ雲ガカクシテモドウシテモ光ハキエハセヌワサテ」と遠鏡は記しているが、これでは、詞

書（主体的「心」）は全く無視されている。これではこの歌一首が持つ世界の全部を理解したことにならない。一首の歌の論理的構成を把握し、客体的世界として一首の歌の内容を、口語訳することによつて実感的に現出させた遠鏡の功績は無論認めるが、その客体的世界を構成する詞の表をいくら追跡しても、この歌の場合では、詞書が指示する心には到達しないのではなかろうか。詞と心との間には質的に非延長的な飛躍がある。

春霞たつを見すててゆく雁は花なき里にすみやならへる

この歌については遠鏡は、「オツツケ花ガ咲クジヤニマア此ノヤウニ春ノ霞ノ立ツタノヲ見ステテ、イヌルアノ雁ハ花トイフモノノ昔カラナイ里ニスミナレタコトカイ、ソレデ花の面白イコトヲ知ラヌデカナアアラウ」と訳しているが、両度聞書では「我心をつくべき花にふかくそめたるよりかくよめる也、花なき里よみ出したるものなり」と記しているがこれを例によつて図式で示せば、

心 ⟶ 1我心をつくべき花にふかくそめたる よりかくよめる也
詞 ⟵ 2花なき里よみ出したるものなり　春霞立つを見すてて……

則ち、この一首の表現せんとする究極の心は、作者自身の花に対する愛着なのである。この花に対する愛着という機能的「心」が働いてやがて「花なき里にすみやならへる」という趣向を促し、更にそれが一首の歌（詞）にまで定着するのだが、この機能的主体的「心」の過程を切り離してはいるが論理的構成の精確な理解の上に立つ遠鏡の解釈は一首の歌の意味内容である。客観的に提示せられた客体的世界の内容というものは、歌の理解に於てはそれを契機として主体的「心」を説明してこそ価値があるが意味内容にだけ終止してはなるまい。雁が北の国へ飛んで行くことを不思議がつているのは意味内容であるが、主体的「心」は花に対する愛着である。先の≪大空を照り行く月し≫の歌にしても、詞の表は月について述べているのであるが、主体的「心」は無実の罪のはれたことを言つているのである。

以上述べた様に、「心」とは意味内容ではなく、意味内容を作り上げるまでの、いいかえれば、産出すべき人間精神の主体的機能であり、産出せられた結果物ではない。この意味での「心」を求めたものが両度聞書の注釈技術であるといえよう。文章に於ては、主体的「心」とは独立してそれ自身で完結した客体的世界が解釈者とは対立してその解釈者の目前に現出するが、歌に於ては、解釈者自身が、その歌の制作過程（その実は解釈過程の投影である）に参与してはじめて歌の世界が完結するわけである。

この様に両度聞書の注釈行為を追体験しながら古今集の歌を味い、その注釈行為の本質を追求してみたわけである。注釈行為を追求するということは、注釈書に記述せられた文献内容を整理し了解することではなく、文献内容を研究手段として、その注釈が記述せられるまでに至つた生産的思考を追求するのである。無論その際注釈書の文献学的考察がその基礎となることはいうまでもないし、現に本稿に於てもそれへの注意はいつも払つてきたつもりである。

四

右の様に両度聞書を意義づけるとき、私は富士谷御杖のことを想う。中世歌学殊に定家以後の二条家歌学と、富士谷成章成寿の北辺歌学とが系譜的に親縁性があるからそう想うばかりでなく、その両

者のもつ歌学説そのものに於て親縁性を考えるのである。これは改めていうまでもない事だが、こゝではこゝでの立場としてそれを述べてみよう。

御杖は表・裏・境という事を述べた。

詞には表・裏・境というものあり　これは詞をつかふ専用にて真を論ずるには用なき事なれど表にのみ目をも心をもとゞむる人は真をしることあたはざる故に今爰にこれを弁ずる也　中略　されば古歌をとくに其真に至ることやすくおのが歌よむにも用なき事をばはぶき足らぬを補ふわざこれにしく道あるまじく候　この三自ら詞にそなはれりとは、たとへば悲しといふ表なるに悲しからずといふ裏をかけてみれば慰むべきよしのあらまほしき境しらるるが如し（五級三差弁）

即ち、悲しというのが詞の表であつたとする。これが、真を論ずる文章であれば、その額面通りに受けとつて、真実の心も又悲しであるとしてもよいのである。心＝詞であつて、詞の表に心が総てでているといつてよいし、或いは、主体的な心と切り離して、詞がそれ自身で完結した客体的世界をもつていると理解してよかろう。ところが、歌に於ては、主体的「心」が悲しからずであり慰むべきよしのあらまほしき故に詞表としては悲しと表現したとする。この際、客観的に提示せられた、悲し　という意味内容をもつてそれを理解しただけでは一つの表現を全きかたちに於て理解したとはいえるだろうか。この詞表を契機として「悲しからず」→「慰むべきよしのあらまほし」→「悲し」という発表主体者の表現意図を理解してこそこの詞の全き理解といえよう。この主体的「心」の経過が詞表に参画してはじめて、歌の世界が完結したといえる。

又御杖は直言、倒語ということをいつた。直言とは心→詞過程の直線的なものであり、倒語には二種あつて、一つは心→詞過程が屈折したものであり、他は心→詞の過程が大きく飛躍しているものである。直言は心＝詞といつてもよい。

倒語に二様あり、一は比喩なりたとへば花のちるをもて無常を思はせ松のときはなるを云ひて人の寿をさとせるなり、二には比喩にあらずして外へそらす也　中略　この二様のうち比喩はよみやすくそらすはよみ難きもの也　此故にそらす方を倒語のいたりとはすべきなり（歌道挙要）

心→詞の過程が屈折し、いわゆる比喩というもので間接に心が抒べられる倒語は古今集にも数多いことである。もう一つの倒語は御杖自身もいうように、古今集以降には殆んどなく万葉集のみに見出される表現過程なのである。この種の倒語を以つて万葉集の最大の特徴とし、この倒語がもつとも大きい表現効果をおさめるが故に、万葉集を称揚したものと考えてよい。同じく真淵が万葉集を称揚してもその解釈の立場が異るのである。

万葉集をばいにしへより心をいれし人々仙覚律師をはじめとして契沖真淵がともがら也　されどこれは歌の表又は事実の相違を正すいとなみを出でず、上古の歌の言霊に解釈の及べる人いまだなし（歌道解醒）

右の文によつていえば、契沖真淵は歌の表又は事実の相違を正すいとなみに於て業蹟をなして来たのであり、その方法は即ち文献学的方法といつていいだろう。それに対して北辺家の立場は、主体的「心」を追求するところにあるといえよう。御杖が倒語ということを唱え出す以前には古今集以後の中世歌学に沈潜していたのであ

り、その眼を以つて万葉集を見た結果、倒語という表現形式を発見したのであると思う。

されども人麿　赤人を聖とし申す事いまだその故をさとり得ず候ひしかば、明くれ万葉集そのほか国史の歌どもを心をいれて見候ひしに、はじめは考へすぎてさま〴〵入りすぐしたる事どもを思ひよせて候ひしが、わが身の実況にあはせ試み次第に苦しみをつみてつひに山上より平地に出で候ひしかば無上と存じたりし三代集は雨後の桃季を見るが如くおもひなされぬ（歌道解醒）

御杖については極めて要点だけしか述べられなかつたが、この北辺歌学は二条家歌学の伝統を受けつぐものであるということと、二条家北辺歌学の歌の解釈に於けるすぐれた点を指摘しておくわけである。

――大阪大学大学院学生――